

## なからぎ

223号

2018年10月

## 図書館と蔵書

京都府立大学・副学長・教務部長 石田 昭人

図書館と聞いて、「薔薇の名前」が反射的に頭に浮んでしまうのは私だけではあるまい。記号論の研究者として有名であったウンベルト・エーコが記したあの分厚い本に取り込まれてしまった人は国内外に多数居るようで、映画化されたこともあって根強いファンを持ち続けている。国際学会のバンケットなどで未だにその話で盛り上げられるのはその証拠だろう。中世、イタリア北部の修道院に聳え立つおどろおどろしい文書館の迷宮の奥に眠る秘密の蔵書に記された一つの文言を巡り、その秘密に触れようとした修道僧達が次々と命を落としていくミステリー仕立ての小説の中には、登場人物の名前にすら深い意味が隠されているといった、いくつもの謎と仕掛けが施されている。さまざまな困難を乗り越え、修練士アドソと師匠のウィリアムは文書館の謎に迫っていくわけだが、そのストーリーは読む者を虜にして離してはくれない。それどころか、読めば読む程、部分部分の解釈に苦しみ、まさに迷宮に入り込んだような気分させられる。「薔薇の名前」という題名ですら容易には解釈できないのだ。いや、むしろこの題名こそが読者に対するエーコの最も深い問いかけなのだろう。文字を持たなかった民族は文化の伝承を口伝という極めて心許ない方法に頼る以外になかった。だからこそ、図書館は人類の叡智をつなぐ場所として古代から大切にされてきた。一方で、その空間は叡智をつなぐことを許された者によって独占されてきた。「薔薇の名前」では、迷宮の中に隠された一冊の蔵書の中の一つの言葉が数百年もの間、いつか扉を開いてその秘密を解き明かしてくれる人が現れるのを待ち続けていた。ヨーロッパの教会や修道院を訪れると、羊皮紙に溜息が出るほど美しく書かれた本が保管されている。印刷技術のなかった時代、本は一冊一冊書き写す以外になかった。だからこそ修道院の文書館にはそのための専用室があったわけだ。

夢にまで見た本学の新しい図書館が開館して1年あまりになる。明るく照らされた本棚や使い勝手のよい閲覧室は新時代の図書館にふさわしい。しかも、貴重な古文書等を有する京都学・歴史館が併設されている。居並ぶ端末からは全文が画像化されたり翻刻されたりしている貴重本の内容までが一瞬で検索できる。とはいっても、それらはあくまでアーカイブであって、明確な意志をもって検索しなければ何も出て来はしない。その意味では「薔薇の名前」の文書館同様、迷宮の奥に隠されているともいえる。いくらAIが発展したところで、それを操るのはあくまで人間の意志であるわけだ。私達の大学の宝である図書館の中では、何百年もの間、誰一人見向きもしなかった一冊の本の中の、たった一つの言葉が、君という存在が現れるのをずっと待ち続けてくれているのかも知れない。それを君自身の手で見つけ出してくれることを強く願っている。

「薔薇の名前 上・下巻」(ウンベルト・エーコ著 河島英昭訳、東京創元社、1990年発行)

## 一冊の「本」にたどりつきました。

大学院生命環境科学研究科 応用生命科学専攻 細 矢 憲

大学院博士課程を終えてから、ひよんなことから大学勤めをする羽目になり、柄にもなく学生さんにモノを教える立場になってしまいました。多くの大学の先生が確固たる「専門分野」をお持ちの中、私は、大学学部、大学院修士課程、大学院博士課程、と全く異なるテーマで研究をしてきましたので、明確な専門を持たず、結果、当てのない教官（当時は国家公務員でした）活動のスタートでした。

そのような状態で、すでに30年が経過しましたが、私が教えてきたのは京都工芸繊維大学の当時の繊維学部高分子学科の学生さん、その後東北大学の工学部機械知能航空工学科の学生さん、そして本学の生命環境学部 環境・情報科学科および食保健学科の学生さんに対しての有機化学です。つまり、有機化学を専門としない学生さんに対して有機化学を教えました。

私は有機化学を教えてきましたが、一方で、私が学生の時に行った研究は、生分解性高分子の合成、界面有機反応の反応機構の解明、光学活性な合成中間体の開発、と真正面から有機化学と取り組んだ訳ではありませんでした。また、教員になってからも、高速液体クロマトグラフィー用の固定相の開発と水環境を対象とした分析科学への取組と、まあ、手段としては有機化学を使うけれど、ガチで有機化学と取り組んできたわけではありませんでした。

有機化学への取り組みとして、ここ何年か、洛北高校の高校2年生以下を対象としたスーパーサイエンスハイスクール (SSH) のお手伝いをしてきましたが、高校で有機化学を習い始めるのは、高校2年生の後期になってからだそうで、一方で、ある高校の「化学」の

教科書を見てみると、その本のボリュームの半分に近い分量が有機化学に関連する分野に割り当てられていて、なんとなくのアンバランスに疑問を感じる（私が高校生にお話をするのは高校2年生の1学期です）こともありました。

繰り返しになりますが、私が教えてきたのは、真正面から有機化学と取り組む学生さんではなく、また、私も本当の意味で専門でもない。このような中で、生活の中で生命現象を理解する上でも、現代の環境問題を理解する上でも重要な有機化学について、一体何を教えたらいいのか、学生さんにどのように伝えたらいいのか？ 毎年試行錯誤しながら、取り組んできたのが実態ではあります。正解は未だに得られていません。

学生さんに教えるには、それなりの教科書が必要となります。カリキュラム上、すでに教科書が決められている場合には、それに従えば良いのですが、多くの有機化学の教科書は、炭化水素から始まり、二重結合や三重結合をもつ炭化水素と続き、ヘテロ原子（炭素と水素以外の原子）を含む化合物、つまり、アルコール、アルデヒド、ケトン、カルボン酸に進み、この辺りで前期が終了します。下手するとカルボン酸に到達せずに前期を終了します。つまり、まだベンゼン環については、出てこない訳です。この区切りは正解なのでしょうか？

ベンゼン環に関する話が出てくるのは、前後期に分かれている有機化学の講義では後期です。前期で出てきた炭化水素からカルボン酸までの内容で、すでに興味を失っている学生さんには、このベンゼン環に入るところが大きな障害となり、有機化学に対する興味を

さらに失速させてしまいます。当然、ベンゼン環に関する内容には、前期でも習った官能基（アルコールだとか、カルボン酸だとか）も出てくるわけで、さらに学生さんの混迷の度を深めるばかりです。一方で、ベンゼン環を持つ化合物は、医薬品でも極めて大事な官能基なのですが。

実際に習う有機化学では、お気づきの方も多いたと思いますが、単に様々な官能基を有する有機化合物の性質を知るだけではなく、その反応もやらねばなりません。有機反応に留まらず、化学反応式は、あっさりとして書いてしまうと、一体どうやってこの反応を進行しているのか？が分からず、結果、高校の時と同じように、その反応を覚え込むという、良くないスパイラルに入り込んでしまうことは必至です。

そうです、普通の有機化学の教科書に従えば、まあ、おもしろくないことこの上無く、実は最も大事なこと、つまり、人間に密接に関連した有機化学について、これはおもしろいというところまで到達することが困難になってしまうわけです。よく、有機化学は「覚える」学問ではない、と言われてきたと思います。が、実際に、旧来のカリキュラムに従えば、覚える学問から脱することなどできないわけです。

京都工芸繊維大学では、高分子学科の学生さんが対象だったので、まだ、有機化学への意識が低くありませんでしたし、必修科目であったのと、基礎や実験を含めると2年間有機化学に関連する授業を担当しましたので、それなりの理解はあったと思います。が、東北大学では、専門性もなく、必須でもなく、かつ半期という短い期間で有機化学を教えるという状況では、旧来の方法ではまったく歯が立たないのが実情でした。

そこで思いついたのは、有機化学の教科書を反対に、つまり、本の後ろから逆に前にさかのぼって教えてみたらどうなるやろう？ということで、試験的に実行してみました。多くの有機化学の教科書を見れば、後ろの方に

は、糖質化合物、脂質、アミノ酸とタンパク質、核酸、有機高分子化合物と生命科学や、生活に密接に関連した項目が目白押しです。これ、講義で最後まで教えられたら、最後におもしろいところが出てくるのですが、大体授業は計画倒れに終わるから、この部分はお座なりになる。だから、教科書を逆に後ろから、と考えた次第です。

実際にやってみると、学生さんの食いつきは悪くなく、ある程度、私の思惑は当たりました。先に挙げた高校の化学の教科書でも、いわゆる有機化学に関わる部分は全体の半分以上で、実際には、生活に関連した有機化学や化合物、合成高分子などに費やされており、この部分を先にやれば、有機化学がより自分に関連した学問の1つとして認識されるのは予想に難くないと思っています。タミフルってどんな構造だろう？って思いませんか？

高校の化学の教科書に舞い戻って恐縮ですが、東京書籍の化学では、有機化学に関連する章の口絵には、質量分析計と核磁気共鳴の写真が掲載されています。先にも書いたように、私の今の専門の1つは、高速液体クロマトグラフィーを用いる水の環境分析です。特に最近問題になっているのは、医薬品や生活関連の化学物質です。有機化学に興味を持って貰うには、そういった分析化学も重要ではないのか？と最近は思っている次第です。

最後に、30年間の試行を基に、有機化学を専門としない学生さんに半期で教えるために、本を書いてみました。まだまだ未完成ながら、1つの形にしてみました。それは、「化学の基本シリーズ② 有機化学（久保拓也・細矢憲 共著）化学同人（2017）」です。



「化学の基本シリーズ②有機化学」（久保拓也・細矢憲共著、化学同人、2017年発行）

## 明治150年を中間点で俯瞰する —— 恒藤恭『新憲法と民主主義』(1947) ——

文学部歴史学科 小林 啓 治

恒藤<sup>つねとうきょう</sup>恭という人物をどれだけの人が知っているだろうか。恒藤は芥川龍之介の親友であり、第一高等学校での同級生であった。また、1933年の滝川事件で京都帝国大学を辞職した教授の一人であったといえ、少しはイメージが沸いてくるだろうか。恒藤の専門は法哲学で、戦前デモクラシー思想の頂点をなす思索を展開し、戦後は「平和的民主主義国家」の建設のために活発な言論活動を行った。その間、彼は下鴨に住んでいた。

それにしても、なぜ明治150年を見る際にこの本なのか。その理由は、この本によって、ほぼ中間点で前後の歴史を俯瞰することが可能になるからである。恒藤は、日本国憲法の成立をもって、「外的権威の倫理の時代は終り、内的権威の倫理の時代がはじまった」とした。「内的権威の倫理」とは、「あらゆる人間が、いかなる外的権威によっても強制されることなく、ひとへに自己の内奥から発する要求にもとづいて真に自発的に肯定するような理念」によって導かれるものである。

恒藤の思想を貫くのは、次の一文である。「今後の日本における国民生活を制約すべき基本原理は、『われわれ日本人は、論理的に見て、日本人たるに先立つて一個の人間として存在する』といふ根源的事実の正しい認識から出発することによつてのみ見出される」。じっくり読むと含蓄のある言葉である。恒藤がこれを書いてから70年以上たつが、「いま、時代は逆行していないだろうか」という深刻な疑問をいだかざるをえない。歴史家にとって「明治150年」とは、きわめて重く、しかし目を背けてはならない課題を改めて自覚させてくれるテーマである。それに関わってもう一つ、知念ウシ『シランフナーの暴力』(未来社、2013)を紹介しておきたい。約150年続く沖縄差別を「日本人」が考える上で、欠かせない本の一つである。

---

「新憲法と民主主義」(恒藤恭著、岩波書店、1947年発行)

## 図書館運営委員会の開催報告について

平成30年度第1回図書館運営委員会が去る7月23日（月）に開催されました。委員会の構成員は表のとおりであり、委員会では平成29年度の事業・決算報告とともに、平成30年度の予算案及び事業計画案が承認されました。

事業計画では、京都府公立大学法人の年度計画として定められている教育・研究環境の充実、向上を目指して、電子ジャーナル・データベースの維持や電子ブックの購入とともに、学術機関リポジトリ等を活用した研究成果等についての情報発信に取り組んでいくことが確認されました。また、併せて新たな図書館としてオープンした昨年度の図書館利用状況についても報告されました。

その内容は本図書館報の前回発行分（7月発行、222号）でもお知らせしていますが、新たな設備等が整備された中、その利便性・快適性等が認知されるにつれ、今後ますます利用が増加していくことなどが確認されました。

### 平成30年度 図書館運営委員会 (WG 体制)

30. 7. 1 現在

所 属	職 名	委員氏名	所属WG
附属図書館	館 長 (文学部教授)	菱 田 哲 郎	
文 学 部	教 授	山 崎 福 之	自己評価・あり方検討
	教 授	中 純 夫	電子ジャーナル
	准 教 授	出 口 菜 摘	選書
公共政策学部	教 授	野 田 浩 資	選書
	准 教 授	下 村 誠	電子ジャーナル
	准 教 授	竹 部 晴 美	自己評価・あり方検討
生命環境科学 研 究 科	教 授	矢 内 純 太	選書
	准 教 授	大 坪 憲 弘	電子ジャーナル
	教 授	桑波田 雅 士	自己評価・あり方検討
	教 授	細 矢 憲	選書
	准 教 授	福 井 亘	電子ジャーナル
	准 教 授	高 濱 淳一郎	自己評価・あり方検討
附属図書館	事 務 長	住 山 貢	
	主 査	澤 村 久 恵	
	主 事	田 辺 恵美子	(幹事)

## 図書館からのお知らせ

### オープンキャンパスで図書館を見学いただきました！

去る7月21日(土)、22日(日)の2日間にわたり、本学の「オープンキャンパス2018」が開催され、希望者を対象とした校内ツアー等で図書館をご見学いただきました。

ツアー参加者は両日併せて約140名でしたが、ツアー以外も合わせると来館された高校生及び保護者等の方々は実に約1,000名を数えました。両日とも好天にも恵まれて、というよりも猛暑日とあって、屋内、とりわけ冷房のよく効いた図書館での見学は、それだけで十分に参加者から好評だったのではないのでしょうか。

特に今回のツアーでは、これまでの館内自由見学と異なり、わずかな時間ながらも書庫はもとより、閲覧カウンターでの手続きや研究個室・グループ研究室に係る利用方法の説明とともに、府大図書コーナーの紹介など、各ツアーグループを職員が引率しご案内する方法で実施させていただきました。

そして、ツアーの最後に、府大のPRとともに「次回、本学の学生さんとして皆さんにお目にかかることを楽しみにしております」という激励(?)の言葉で締めくくりましたが、「はい」としっかりと返事をいただく方も少なくなく、改めて本学の志望の高さ、人気ぶりを見たような気がします。

昨年オープンした新しい図書館の見学を通じ、参加者にとって少しでも気に入っていただき、本学への入学意欲が高まったのであれば誠にうれしい限りであります。



図書館内の見学ツアー風景

## カレンダー

9:00~  
21:00

9:00~  
17:00

休館  
第2水曜日  
祝日  
年末年始

※平日17:00以降及び土日には行っていないサービスがあります。  
ご了承ください。  
詳しくは、図書館ホームページでご確認ください。



2018年10月

2018年11月

2018年12月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

★10/9(火) 夏休み貸出返却日



日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	



日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

★12/11(火)~ 冬休み貸出スタート  
(府大学生、教職員のみ)  
返却予定日2019年1/15(火)  
★12/28(金)~ 1/4(金) 年末年始休館